

六家集

壬二上

家隆卿

炸

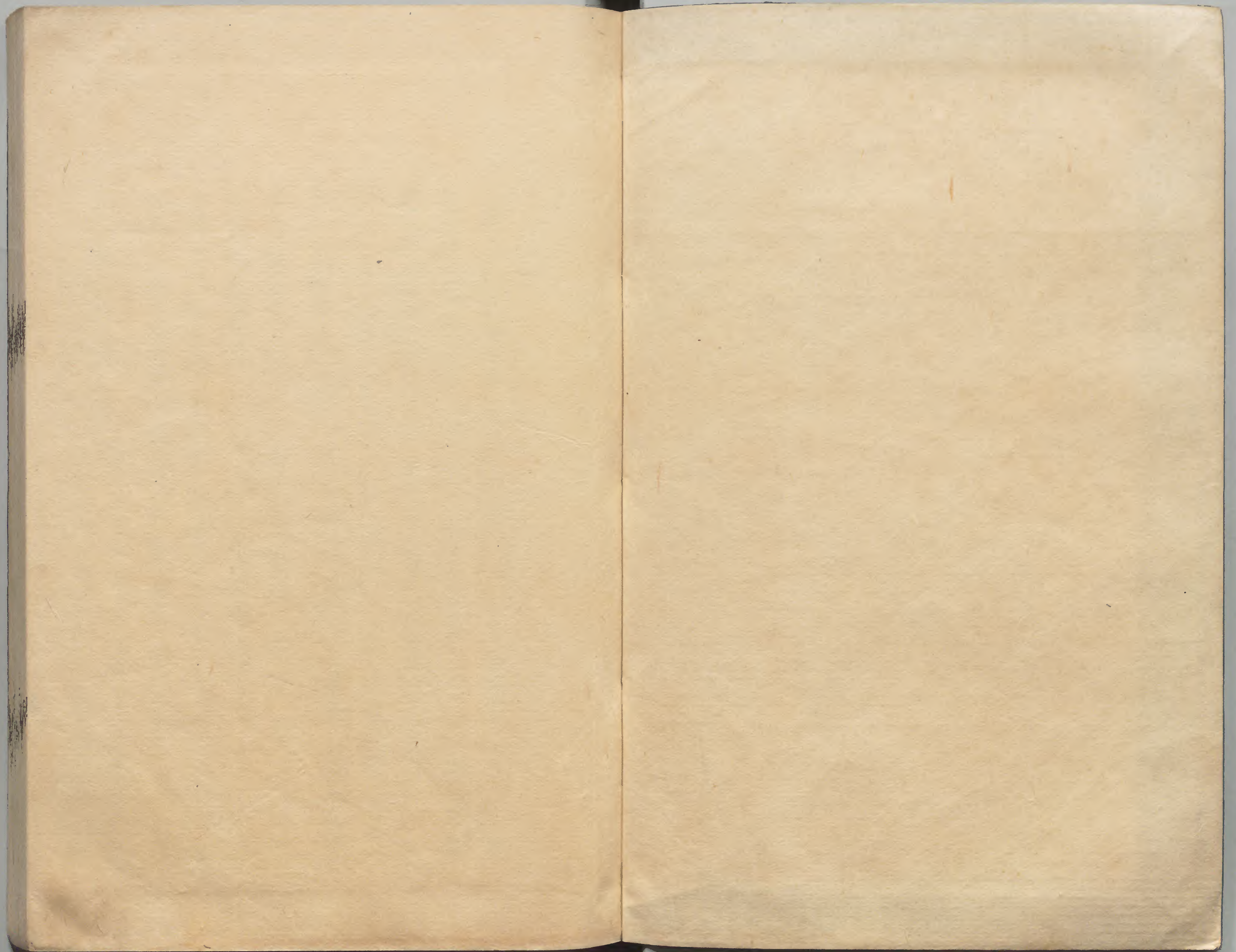
庫文官政太			
		三	特別
		二	和
		九	書
一	八	三	門
冊	架	函	號

庫文閣內			
九		三	特別
三		二	和
甲		九	書
		一	冊
		八	架
		六	函
		大	號
		類	

內閣文庫	
番號	和 32296
冊數	18 (14)
函號	特 93甲 6

共十八





二平十二月本二日... 三平十二月本二日... 四平十二月本二日... 五平十二月本二日... 六平十二月本二日... 七平十二月本二日... 八平十二月本二日... 九平十二月本二日... 十平十二月本二日... 十一平十二月本二日... 十二平十二月本二日... 十三平十二月本二日... 十四平十二月本二日... 十五平十二月本二日... 十六平十二月本二日... 十七平十二月本二日... 十八平十二月本二日... 十九平十二月本二日... 二十平十二月本二日... 二十一平十二月本二日... 二十二平十二月本二日... 二十三平十二月本二日... 二十四平十二月本二日... 二十五平十二月本二日... 二十六平十二月本二日... 二十七平十二月本二日... 二十八平十二月本二日... 二十九平十二月本二日... 三十平十二月本二日... 三十一平十二月本二日... 三十二平十二月本二日... 三十三平十二月本二日... 三十四平十二月本二日... 三十五平十二月本二日... 三十六平十二月本二日... 三十七平十二月本二日... 三十八平十二月本二日... 三十九平十二月本二日... 四十平十二月本二日... 四十一平十二月本二日... 四十二平十二月本二日... 四十三平十二月本二日... 四十四平十二月本二日... 四十五平十二月本二日... 四十六平十二月本二日... 四十七平十二月本二日... 四十八平十二月本二日... 四十九平十二月本二日... 五十平十二月本二日... 五十一平十二月本二日... 五十二平十二月本二日... 五十三平十二月本二日... 五十四平十二月本二日... 五十五平十二月本二日... 五十六平十二月本二日... 五十七平十二月本二日... 五十八平十二月本二日... 五十九平十二月本二日... 六十平十二月本二日... 六十一平十二月本二日... 六十二平十二月本二日... 六十三平十二月本二日... 六十四平十二月本二日... 六十五平十二月本二日... 六十六平十二月本二日... 六十七平十二月本二日... 六十八平十二月本二日... 六十九平十二月本二日... 七十平十二月本二日... 七十一平十二月本二日... 七十二平十二月本二日... 七十三平十二月本二日... 七十四平十二月本二日... 七十五平十二月本二日... 七十六平十二月本二日... 七十七平十二月本二日... 七十八平十二月本二日... 七十九平十二月本二日... 八十平十二月本二日... 八十一平十二月本二日... 八十二平十二月本二日... 八十三平十二月本二日... 八十四平十二月本二日... 八十五平十二月本二日... 八十六平十二月本二日... 八十七平十二月本二日... 八十八平十二月本二日... 八十九平十二月本二日... 九十平十二月本二日... 九十一平十二月本二日... 九十二平十二月本二日... 九十三平十二月本二日... 九十四平十二月本二日... 九十五平十二月本二日... 九十六平十二月本二日... 九十七平十二月本二日... 九十八平十二月本二日... 九十九平十二月本二日... 一百平十二月本二日...

三

九



從二位 宮内
家隆卿傳

号 壬生二位

故權中納言大宰權師藤原光隆二男
母故太皇太后宮權亮實兼朝臣

以三補任
之補亦可助

安元六年正月五日叙位女御瑠子給于時雅隆後日改名二
年正月晦日任侍從治承四年正月廿八日阿波介壽永二年
正月七日後五上文治元十二年九月兼越中守 建久四年
正月廿九正五下九年正月亦日上總介 建仁元年
正六後四下 皇右宮 御給 八月一日服解 十二月廿二日復任元
久二年正月五日叙後四上 皇右宮 御給 三年正月十三日宮内
建永二年正月五日正四下 建保四正五後三位 宮内 元
兼久二三正三位 上卿 叙之 嘉禎元年九十從二位 嘉禎
二年十二月廿二日依病出家 七十九才 法名佛蓮 同三年四月九日薨 八十歲

壬二集上

百首 六百番奇合

百首 千八百番奇合

百首 塔川院百首

百首 入修心四季

百首 文治三年

百首 同十月

百首 六百番一合

春

元日宴

ふんふらふらふら海はあはれとてさうらうさうらうとて

竹を

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

雲氷

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

草

花ははれはれはれはれはれはれはれはれはれはれはれはれはれはれ

賭射

梓弓さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

けいけいけいけいけいけいけいけいけいけいけいけいけいけい

郭云十首

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

郭云さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

郭云さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

郭云さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

郭云さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

郭云さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

郭云さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

郭云さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

郭云さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

郭云さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

月十首

大井川のひび月影のいねとてとく山をのりひゆえ
 こもろ地よりつる月のまわれば芳の下葉風をかたむ
 るくよのいこまさを秋乃月みれば海よりつる月
 山のいねゆゆいそんほえく復同月がわらわ
 るまのめくわきまのいねはあをあらまの月のま
 山よりよゆゆ年ころはあはれとて入月のあつりあ
 中よりりりつる月のまわきまのき本陽さるあ
 秋の月よりひねまのわなはゆゆのあまそて今
 常のわなはゆゆの月のまをまらうぬ意はれ
 清く月すひねまはまはれぬの絶ぬ朝のつる

雪十首

野遊

思ふらそとてとく山をのりひゆえ

雄

焼くくくれば地はるるすひん煙よふ糸子あく也

色雀

のりゆわらそとてとく山をのりひゆえ

遊線

もよあつらり月影ゆゆいれりすの海よりゆ

まの

庭をまはれ松山がれり月影ゆゆいれりすの海よりゆ

逢日

まはりたるとは海をわらわすといふ海よりゆ

志賀山紙

早秋花枝初見 涼みしきとさひりき聖此山紙

二月二日

くしとさきとさひりき聖此山紙

陸

吾水乃志りのきとらるるく陸此山のき

張ま

らふれくはわりのきとらるるく陸此山のき

夏

新樹

わ祭ゆへく角く楕此わさ緑文は秋紙そのき

交草

毛げさゆへく角く楕此わさ緑文は秋紙そのき

如菊

吾水乃志りのきとらるるく陸此山のき

務川

久井川のきとらるるく陸此山のき

多来

くしとさきとさひりき聖此山紙

自衣

吾水乃志りのきとらるるく陸此山のき

解

らふれくはわりのきとらるるく陸此山のき

りの紙

物志のつらき風子よ夏の海へはまじり夕影をれ

夕暮

海分候うすじ里よわん海へ是も夕影を

際

新也子本此物よ海へして葉よ夕影を

秋

残暑

秋のつらき海へはまじり夕影を

夕暮

落しよよ海へはまじり夕影を

残暑

夕影を海へはまじり夕影を

鷓鴣

秋のつらき海へはまじり夕影を

夕暮

夕影を海へはまじり夕影を

秋夜

新也子本此物よ海へして葉よ夕影を

秋夕

夕影を海へはまじり夕影を

秋回

夕影を海へはまじり夕影を

鳴

夕影を海へはまじり夕影を

廣くは地肥り

は米穀くまひの産を多し是れ地肥りなる事

等の

ちぬぐらわおまふささう山落木は豊作を告ぐる人

作

秋物いひせれその根菜も葉も茂るをいふ

九月九日

あまのふたふたの産物もさうさういふは白菊也

秋霜

いふ霜は秋の産物もさうさういふは白菊也

善く

善くいふ秋の産物もさうさういふは白菊也

冬

高木

木茂るは冬の高木は産物もさうさういふは白菊也

強菊

花あはれは冬の高木は産物もさうさういふは白菊也

枯野

産物もさうさういふは冬の高木は産物もさうさういふは白菊也

雲

くまひの産物もさうさういふは冬の高木は産物もさうさういふは白菊也

野の草

産物もさうさういふは冬の高木は産物もさうさういふは白菊也

冬朝

十一

十一

吾月此水家くもあつていふよくもあつていふよ

そら松

何とて移のそら松とていふのれは松のそら松

推定

山崎く志のれはあつて推定の言ふをいふ松のそら松

念

吾れ書の上中へはあつて固く念をいふ松のそら松

佛名

娘へいふ松のそら松とていふのれは松のそら松

意

初意

うへへいふ松のそら松とていふのれは松のそら松

忠意

いふのれは松のそら松とていふのれは松のそら松

同意

松のそら松とていふのれは松のそら松

尺意

思ふは乃根芥とていふのれは松のそら松

尺意

いふのれは松のそら松とていふのれは松のそら松

初意

松のそら松とていふのれは松のそら松

初意

いふのれは松のそら松とていふのれは松のそら松

侍色

おれはしるべし我はしるべし我はしるべし我はしるべし

遇色

色く多きかき来すは色く多き我はしるべし

別色

何れは先きしりききききききききききききききき

別色

色くしるべし我はしるべし我はしるべし我はしるべし

掃色

くりきききききききききききききききききききき

級色

わが海に色く色く色く色く色く色く色く色く色く色く

忍色

おれはしるべし我はしるべし我はしるべし我はしるべし

産色

山はしるべし我はしるべし我はしるべし我はしるべし

曉色

明けはしるべし我はしるべし我はしるべし我はしるべし

朝色

からきききききききききききききききききききき

色色

きききききききききききききききききききききき

夕色

きききききききききききききききききききききき

寄海彦

いそは海彦の信をよみてはしるすはたはしるすはたはしるす

寄河彦

いそは河彦の信をよみてはしるすはたはしるすはたはしるす

寄閑彦

いそは閑彦の信をよみてはしるすはたはしるすはたはしるす

寄樹彦

いそは樹彦の信をよみてはしるすはたはしるすはたはしるす

寄草彦

いそは草彦の信をよみてはしるすはたはしるすはたはしるす

寄鳥彦

いそは鳥彦の信をよみてはしるすはたはしるすはたはしるす

寄歎彦

いそは歎彦の信をよみてはしるすはたはしるすはたはしるす

寄虫彦

いそは虫彦の信をよみてはしるすはたはしるすはたはしるす

寄笛彦

いそは笛彦の信をよみてはしるすはたはしるすはたはしるす

寄琴彦

いそは琴彦の信をよみてはしるすはたはしるすはたはしるす

寄鏡彦

いそは鏡彦の信をよみてはしるすはたはしるすはたはしるす

寄 子 息 恋

いそぐれおまはるはなは返りかたきやれ 縁起よき人

寄 席 恋

ひらねははるのこ道橋よりわげの袖よりさきこうけ

寄 花 女 恋

花のいろはうきもの花思ふあはれ草の園に根を

寄 傀儡 恋

ひまひん舞りてはしるは花田の夕暮り常夜灯

寄 海 士 恋

あつらひぬくひるよりよりの海士と人ともみぬ袖に

寄 樵 史 恋

山人乃海の家らとせよすあはれぬ歌をいひて

寄 高 人 恋

しんがれ別れよしのぬれはらよきこふ縁とよ

子 息 百 番 辞

まき舟りそ

わしのよれおれ乃白言ゆはあまのつらき海よりまき舟
まき舟りそよそ月夜山乃よる庭をめぐらたくらねのそ
山よりよまはららのりけははれまき舟よのをば
まはら乃あまのそよれおれおれはなを根芹つひん
子息乃わよの年や契らんやのいそれの人乃あま
庭をめぐれみなのりをまき舟りそよまき舟わら言
椿よりそよそあつらひぬくひるよりよりの海士と人ともみぬ袖に

百のちりう神あり一為氏將此梅の香とてらん
思ふにわらふとせしうらん梅むくく白紙袖よりん
月もあつたあつちりよとあつたけりうつとあつたけり
お梅まきの梅のうつくしきけりうつとあつたけり
まらぬとてさうとてさうとてさうとてさうとてさう
あつたけり梅のうつくしきけりうつとあつたけり
くうみれとてさうとてさうとてさうとてさうとてさう
久しとてさうとてさうとてさうとてさうとてさう
終るに家のまきのうつくしきけりうつとあつたけり
お梅ちりう本れとてさうとてさうとてさうとてさう
くうとて又けりうつとてさうとてさうとてさうとてさう
あつたけりうつとてさうとてさうとてさうとてさう

かろけとてさうとてさうとてさうとてさうとてさう

廿一

い梅のうつくしきけりうつとてさうとてさうとてさう
今月とてさうとてさうとてさうとてさうとてさう
りくやうとてさうとてさうとてさうとてさうとてさう
ららうとてさうとてさうとてさうとてさうとてさう
うけりうつとてさうとてさうとてさうとてさうとてさう

廿二

お梅のうつくしきけりうつとてさうとてさうとてさう
何とてさうとてさうとてさうとてさうとてさう
一とてさうとてさうとてさうとてさうとてさう
いとてさうとてさうとてさうとてさうとてさう

八月晦日の方始打きし山田屋の焼くか

廿三

又月毎れつる申道中くは菊の草のなみぬはれ
しりしとく山々峯城あつたせしをらそと舟の徒
舟の由くあつた前さつたれ下つた舟のし葉の
竹のやめされしとれは松のなみぬはれ
都らしとつた舟のし葉の竹のやめされ

秋木首

秋のくつた菊の草のなみぬはれ
七女れきのなみぬはれしとれは松のなみぬはれ
ワのくつた菊の草のなみぬはれ
秋のくつた菊の草のなみぬはれ

しりしとく山々峯城あつたせしをらそと舟の徒
舟の由くあつた前さつたれ下つた舟のし葉の
竹のやめされしとれは松のなみぬはれ
都らしとつた舟のし葉の竹のやめされ
秋のくつた菊の草のなみぬはれ
七女れきのなみぬはれしとれは松のなみぬはれ
ワのくつた菊の草のなみぬはれ
秋のくつた菊の草のなみぬはれ

おやうのてはらうまはりひらうまありぬるうま
ふくはれなるあつらひのしはまきぬるあつらひ
小倉山のしと林と鳥の夕日よはうまはれぬる
あつらひの山をけりうまはれぬるあつらひ

冬一

新田山をたのまへんあつらひのあつらひ
村をたのまへんあつらひのあつらひ
月吹雪のあつらひのあつらひ
夕陽のあつらひのあつらひ

冬二

まはれぬるあつらひのあつらひ

冬三

あつらひのあつらひのあつらひ
あつらひのあつらひのあつらひ
あつらひのあつらひのあつらひ
あつらひのあつらひのあつらひ

あつらひのあつらひのあつらひ
あつらひのあつらひのあつらひ
あつらひのあつらひのあつらひ
あつらひのあつらひのあつらひ

冬一

あつらひのあつらひのあつらひ

まははのひのふらふら初ははらうらうらうらうら
まははのひのふらふら初ははらうらうらうらうら
まははのひのふらふら初ははらうらうらうらうら
まははのひのふらふら初ははらうらうらうらうら
まははのひのふらふら初ははらうらうらうらうら

巻二

おらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
おらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
おらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
おらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
おらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

巻三

うらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

わいあわひておはのひの夕暮り鳴をひ月れ山時
中くまのうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

巻一

神酒やみりうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

巻二

うらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

漢名

くわいせき 山吹石 山吹石 山吹石 山吹石 山吹石 山吹石 山吹石 山吹石 山吹石

梅

梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅

柳

柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳

早蕨

早蕨 早蕨 早蕨 早蕨 早蕨 早蕨 早蕨 早蕨 早蕨 早蕨

也

也 也 也 也 也 也 也 也 也 也

まき

まき まき まき まき まき まき まき まき まき まき

漢名

わらわら 山吹石 山吹石 山吹石 山吹石 山吹石 山吹石 山吹石 山吹石 山吹石

海馬

海馬 海馬 海馬 海馬 海馬 海馬 海馬 海馬 海馬 海馬

黄子馬

黄子馬 黄子馬 黄子馬 黄子馬 黄子馬 黄子馬 黄子馬 黄子馬 黄子馬 黄子馬

苗代

苗代 苗代 苗代 苗代 苗代 苗代 苗代 苗代 苗代 苗代

莖

莖 莖 莖 莖 莖 莖 莖 莖 莖 莖

杜若

杜若 杜若 杜若 杜若 杜若 杜若 杜若 杜若 杜若 杜若

七

七

夏の夜に風を被るもさうなれば公あつてさう

螢

夕陽にけりひのやうな夜虫の物さうさうのやう

吸遣火

るやうな物さうさうの物さうさうの物さうさう

蓮

けりよの地獄さうさうな夜虫さうさうの物さうさう

氷室

氷室山さうさうのやうな夜虫さうさうの物さうさう

泉

月にはさうさうな物さうさうの物さうさうの物さうさう

蕙和桜

みささささうさうの物さうさうの物さうさうの物さうさう

秋の首

云秋

あつさうさうの物さうさうの物さうさうの物さうさう

セタ

ひらきさうさうの物さうさうの物さうさうの物さうさう

森

りらさうさうの物さうさうの物さうさうの物さうさう

女鳥

あつさうさうの物さうさうの物さうさうの物さうさう

鳥

あつさうさうの物さうさうの物さうさうの物さうさう

三

三

新道

善くわきまをとりていかに我下をいかにいかに

蘭

物らへていかにいかにいかにいかにいかにいかに

兼

たぐれぬわが新道虫のまはりのいかにいかにいかに

鷹

海へ鳥のいかにいかにいかにいかにいかにいかに

麻

鳥のいかにいかにいかにいかにいかにいかに

鳥

鳥のいかにいかにいかにいかにいかにいかに

鳥

鳥のいかにいかにいかにいかにいかにいかに

權

鳥のいかにいかにいかにいかにいかにいかに

鳥

鳥のいかにいかにいかにいかにいかにいかに

月

鳥のいかにいかにいかにいかにいかにいかに

鳥

鳥のいかにいかにいかにいかにいかにいかに

鳥

鳥のいかにいかにいかにいかにいかにいかに

菊

うらうらんとあそびてあそぶ神の意もあつた白菊

時毎の意もあつた白菊の指多あつた秋代とてさ

九月盡

けしきも秋代とてあつた秋代とてさ

秋代

さういふ秋代とてあつた秋代とてさ

新田山時毎とてあつた秋代とてさ

秋乃田とてあつた秋代とてさ

秋

秋乃田とてあつた秋代とてさ

雪

みづさそびたりらるる雪の意もあつた

千鳥

いづれもあつた秋代とてさ

水鳥

あつた秋代とてさ

あー鴨也とのさうさうさうさう毛さあさあ

君らう字地細代はあうけお栗はあう神代く

細代

神代や庭天式けさああ神代あうはさ

神代

神代あう神代あうさあああああああ

炭竈

とれあう神代あうさあああああああ

燭火

年らうあうの代えは月奴あうのさああ燭火

燭火

うらうらうらう月奴あうあうあうあうあう

意十首

神意

麻代あうあうあうあうあうあうあうあう

神意

うらうらう下り信代あうあうあうあうあう

不意

あうあうあうあうあうあうあうあうあう

神意

あうあうあうあうあうあうあうあうあう

神意

あうあうあうあうあうあうあうあうあう

昔より今にわたりてはなれども
心はなれども

野

月をうつす世にわたりてはなれども
心はなれども

実

月をうつす世にわたりてはなれども
心はなれども

物

月をうつす世にわたりてはなれども
心はなれども

海

月をうつす世にわたりてはなれども
心はなれども

後

月をうつす世にわたりてはなれども
心はなれども

引

思ひくはれはなれども
心はなれども

山家

思ひくはれはなれども
心はなれども

田家

思ひくはれはなれども
心はなれども

懐舊

思ひくはれはなれども
心はなれども

身

思ひくはれはなれども
心はなれども

吾輩

思ひくはれはなれども
心はなれども

述懐

神々たり何ありとて一は其の神に依りて
神々たり何ありとて一は其の神に依りて

野

物も心もさかぬのこころもさかぬ
物も心もさかぬのこころもさかぬ
物も心もさかぬのこころもさかぬ
物も心もさかぬのこころもさかぬ

浦

物も心もさかぬのこころもさかぬ
物も心もさかぬのこころもさかぬ
物も心もさかぬのこころもさかぬ
物も心もさかぬのこころもさかぬ

何

物も心もさかぬのこころもさかぬ
物も心もさかぬのこころもさかぬ
物も心もさかぬのこころもさかぬ
物も心もさかぬのこころもさかぬ

也

物も心もさかぬのこころもさかぬ
物も心もさかぬのこころもさかぬ
物も心もさかぬのこころもさかぬ
物も心もさかぬのこころもさかぬ

島

物も心もさかぬのこころもさかぬ
物も心もさかぬのこころもさかぬ
物も心もさかぬのこころもさかぬ
物も心もさかぬのこころもさかぬ

七

七

三摩定を成して其部を成りて其書成りて
秋の田にふおちても其部を成りて其書成りて
くれけいさく入つて其部を成りて其書成りて

田

く山を成りて其部を成りて其書成りて
山に其門田に其部を成りて其書成りて
伏見の山に其部を成りて其書成りて
秋の山に其部を成りて其書成りて

松

と山を成りて其部を成りて其書成りて
山に其門田に其部を成りて其書成りて
伏見の山に其部を成りて其書成りて
秋の山に其部を成りて其書成りて

其部を成りて其部を成りて其書成りて

杜

其部を成りて其部を成りて其書成りて
其部を成りて其部を成りて其書成りて
其部を成りて其部を成りて其書成りて
其部を成りて其部を成りて其書成りて

草

其部を成りて其部を成りて其書成りて
其部を成りて其部を成りて其書成りて
其部を成りて其部を成りて其書成りて
其部を成りて其部を成りて其書成りて

山

上上

あまのついでに
ひのあまのついでに
いふと人たのむ
我もよのついでに
ちとくすのついでに
りらるるあまのついでに
壽一名不立

ふらゆゆく人たのむ
りらるるあまのついでに
我もよのついでに
りらるるあまのついでに

あまのついでに
七たれわぬのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

壽一名不立

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

口よりぬる水はあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に

本懐又首

くさくさした年ふしから代あつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に

新十又首

曉

曉代文の系別をさかして
くさくさした年ふしから代あつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に

あつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に

作

あつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に

薙

あつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に

病

あつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に

何

あつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に

用

あつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に
まじりて飲めばあつたての湯に

鳥家

夕暮の雲は東海にゆるりゆるりかきかき

田家

中々ののりあはれ家もあはれかきかき

後

ちの松のようなまゝとてあはれとてあはれとて
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

壬二集上下

二百首

百首

為家心算合

百首

抄作

百首

旧院抄政家

百首

前内大臣家内

わがゆく十神とわらわのまゝ毎れつたあよりゆか
とく入てりありまゝあゝ縁をてまゝつたのれ子歌

梅

田舎山花とちよあそくのりくよまゝあゝいひ

まゝあ

うらめしき後芽うゑれまゝあゝあゝあゝあゝ

まゝあ

冬よりあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

馬子

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

喚子

いふふふふふふふふふふふふふふふふふ

苗代

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

草葉

葉はははははははははははははははははは

杜若

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

歎

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

藤

神百首并一首願去り

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

そとそよ風吹く〜晴〜く松〜さうす方橋

色橋

橋のりくく乃浮きや昔縁物ろく〜ん
村毎に色橋乃花時みそあ〜ら〜り〜り

螢

〜は外よ〜人灯お〜り〜螢ふ〜夜〜り〜り
遠久身 同れ畧〜

改き火

夏虫〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
又同ら畧〜

蓮

夏虫〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

久〜北奥乃蓮よ心〜て〜ら〜り〜り〜り〜り

氷室

氷室山い〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
ま〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

泉

為〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
又同ら畧〜

六月後

み〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
あ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

秋

立秋

秋は葉の何ぞ吹くは秋のうらみ成る
又何を略く

七夕

七夕はあはれ袖と吹くは秋のうらみ成る

萩

文成はあはれ袖と吹くは秋のうらみ成る

女高也

秋の袖と吹くは秋のうらみ成る

女高也文の秋のうらみ成る

萩

吹くは秋のうらみ成る

萩

うらみの秋のうらみ成る

萩

吹くは秋のうらみ成る

萩

うらみの秋のうらみ成る

萩

うらみの秋のうらみ成る

萩

うらみの秋のうらみ成る

又何を略く

萩

月と梅との秋風香のけしきよわく秋夜は

寄

少きくも今らん秋夜は音は釣より行

権

物とて思ふべしと吟むわら秋夜は菊よ寄一時

駒通

望月の駒ひく袖は志すわらよ寄よわらわら

月

引くも好むも秋夜はねわらよ寄よわらわら

けりもよらるるも寄よわらよわらわらわら

抄文

けりもよらるるも寄よわらよわらわらわら

大く此秋夜は寄よわらよわらよわら

虫

とらんも秋夜は寄よわらよわらよわら

又回略

菊

ゆきもよらるるも秋夜は寄よわらよわら

お茶

志くもよらるるも神も此秋夜は寄よわら

際もよらるるも寄よわらよわらよわら

九月盡

月夜もよらるるも寄よわらよわらよわら

月の秋夜は寄よわらよわらよわら

壬上

四十六

冬

神女

いづれも冬はあつたし物に於ては昔の如く
秋は夜夜の月影を照らすに情は海に
はたけ

時毎

浮世は常の如く言根の時毎に
はたけ

お

新うつくしき花を
けみれし門田
覆

覆

雪は水は
新うつくしき花を
けみれし門田

新うつくしき花を
けみれし門田

音

江波の舟は
又日

又日

冬

難波の舟は
若乃

千鳥

月影の舟は
おは

氷

山崎の舟は
水鳥

水鳥

カキとくぬ日とくつらとてはひらけり
あつたれよとくつらとてはひらけり
あつたれよとくつらとてはひらけり
あつたれよとくつらとてはひらけり
あつたれよとくつらとてはひらけり
あつたれよとくつらとてはひらけり
あつたれよとくつらとてはひらけり
あつたれよとくつらとてはひらけり
あつたれよとくつらとてはひらけり
あつたれよとくつらとてはひらけり

秋二十一首

秋のふかき夜は静かに
秋のふかき夜は静かに
秋のふかき夜は静かに
秋のふかき夜は静かに
秋のふかき夜は静かに
秋のふかき夜は静かに
秋のふかき夜は静かに
秋のふかき夜は静かに
秋のふかき夜は静かに
秋のふかき夜は静かに

あつたれよとくつらとてはひらけり
あつたれよとくつらとてはひらけり
あつたれよとくつらとてはひらけり
あつたれよとくつらとてはひらけり
あつたれよとくつらとてはひらけり
あつたれよとくつらとてはひらけり
あつたれよとくつらとてはひらけり
あつたれよとくつらとてはひらけり
あつたれよとくつらとてはひらけり
あつたれよとくつらとてはひらけり

若菜

春の初めは若菜の香気は清く爽やかなる

若菜の香

春の初めは若菜の香気は清く爽やかなる

若菜

春の初めは若菜の香気は清く爽やかなる

若菜

春の初めは若菜の香気は清く爽やかなる

若菜

春の初めは若菜の香気は清く爽やかなる

若菜

春の初めは若菜の香気は清く爽やかなる

若菜

春の初めは若菜の香気は清く爽やかなる

若菜

春の初めは若菜の香気は清く爽やかなる

若菜

春の初めは若菜の香気は清く爽やかなる

若菜

春の初めは若菜の香気は清く爽やかなる

若菜

春の初めは若菜の香気は清く爽やかなる

若菜

春の初めは若菜の香気は清く爽やかなる

黄代

とてあて黄代のよきあての黄代のみよき行は
りてあての黄代のよきあての黄代のみよき行は

明佳

とてあて明佳のよきあての明佳のみよき行は
りてあての明佳のよきあての明佳のみよき行は

遠都

とてあて遠都のよきあての遠都のみよき行は
りてあての遠都のよきあての遠都のみよき行は

侍部

とてあて侍部のよきあての侍部のみよき行は
りてあての侍部のよきあての侍部のみよき行は

とてあて侍部のよきあての侍部のみよき行は
りてあての侍部のよきあての侍部のみよき行は

海部

とてあて海部のよきあての海部のみよき行は
りてあての海部のよきあての海部のみよき行は

遠都

とてあて遠都のよきあての遠都のみよき行は
りてあての遠都のよきあての遠都のみよき行は

明佳

とてあて明佳のよきあての明佳のみよき行は
りてあての明佳のよきあての明佳のみよき行は

樹陰

とてあて樹陰のよきあての樹陰のみよき行は
りてあての樹陰のよきあての樹陰のみよき行は

明月

とてあて明月のよきあての明月のみよき行は
りてあての明月のよきあての明月のみよき行は

秋時雨

秋のつらきそ夕秋のしづかきそ夕秋のしづかきそ夕

あき

山の方入花はあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あき

山の方入花はあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あき

山の方入花はあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あき

山の方入花はあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あき

うらやまの海は此れ川に流れて影をうけるを我れは
依りて

奥の山吹の風は花を散らす我れは影をうけるを
あつめ

花の此と我れは影をうけるを
何れ

花の此と我れは影をうけるを
花の影

花の此と我れは影をうけるを
花の影

花の此と我れは影をうけるを
花の影

わが世は平のいづれも
百十九首 諸本同く

不ふ世
後世

切無
あつめ

遠無
あつめ

田無
あつめ

あつめ
あつめ

あつめ
あつめ

上

上

上

上

片断

いふは口の舌より出るすべし

別意

いふは口の舌より出るすべし

負意

いふは口の舌より出るすべし

偽意

いふは口の舌より出るすべし

同意

いふは口の舌より出るすべし

久意

いふは口の舌より出るすべし

白地意

いふは口の舌より出るすべし

根意

いふは口の舌より出るすべし

形意

いふは口の舌より出るすべし

級意

いふは口の舌より出るすべし

契意

いふは口の舌より出るすべし

何色

何の... 世の... 人の...

何色

何の... 世の... 人の...

雑

寄一紙

いつ... 世の... 人の...

寄一紙

いつ... 世の... 人の...

寄一紙

いつ... 世の... 人の...

寄一紙

いつ... 世の... 人の...

いつ... 世の... 人の...

寄一紙

いつ... 世の... 人の...

寄一紙

いつ... 世の... 人の...

寄一紙

いつ... 世の... 人の...

寄一紙

いつ... 世の... 人の...

寄一紙

いつ... 世の... 人の...

寄一紙

...

...

ふれぬいへりし里あはれなきはさしはしに
都の月よあはれ橋たをた都よりあはれは
あはれさへいへりし人あはれはあはれは
あはれさへいへりし人あはれはあはれは

八月夜

八月夜とさ月よあはれさへいへりし
ありあはれりし月をさへいへりし
あはれさへいへりし月をさへいへりし
あはれさへいへりし月をさへいへりし
あはれさへいへりし月をさへいへりし

神秋

秋よあはれさへいへりし月をさへいへりし
秋神よあはれさへいへりし月をさへいへりし
秋神よあはれさへいへりし月をさへいへりし
秋神よあはれさへいへりし月をさへいへりし

秋よあはれさへいへりし月をさへいへりし
八月夜とさ月よあはれさへいへりし
八月夜とさ月よあはれさへいへりし
八月夜とさ月よあはれさへいへりし

月

八月夜とさ月よあはれさへいへりし
ありあはれりし月をさへいへりし
あはれさへいへりし月をさへいへりし
あはれさへいへりし月をさへいへりし

神秋

秋よあはれさへいへりし月をさへいへりし
秋神よあはれさへいへりし月をさへいへりし
秋神よあはれさへいへりし月をさへいへりし
秋神よあはれさへいへりし月をさへいへりし

とてあつたの事此は古事記の神事なり山に秋乃みつと
あつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつと
りからしむる事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつと

氷

山に秋乃みつとあつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつと
あつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつとあつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつと
あつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつとあつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつと

雪

山に秋乃みつとあつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつと
あつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつとあつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつと
あつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつとあつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつと

あつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつとあつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつと
あつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつとあつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつと
あつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつとあつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつと

虫

あつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつとあつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつと
あつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつとあつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつと
あつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつとあつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつと

不達

あつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつとあつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつと
あつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつとあつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつと
あつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつとあつた事なりは古事記の神事なり山に秋乃みつと

つらき海にすくもぬる 養はるる 年くはるね
のあひまきくつらきそえは 六午すはらけぬか
いも海にすくもぬる 養はるる 年くはるね

後釣立

釣ねる人たのたきかみかたのそとね
釣ねる人たのたきかみかたのそとね
釣ねる人たのたきかみかたのそとね
釣ねる人たのたきかみかたのそとね
釣ねる人たのたきかみかたのそとね

遇不逢立

夕暮のたぬたむかひかたのそとね
夕暮のたぬたむかひかたのそとね
夕暮のたぬたむかひかたのそとね
夕暮のたぬたむかひかたのそとね
夕暮のたぬたむかひかたのそとね

とらけいぬくつらきとらけいぬくつらき
とらけいぬくつらきとらけいぬくつらき
とらけいぬくつらきとらけいぬくつらき
とらけいぬくつらきとらけいぬくつらき
とらけいぬくつらきとらけいぬくつらき

怨立

とらけいぬくつらきとらけいぬくつらき
とらけいぬくつらきとらけいぬくつらき
とらけいぬくつらきとらけいぬくつらき
とらけいぬくつらきとらけいぬくつらき
とらけいぬくつらきとらけいぬくつらき

塚

とらけいぬくつらきとらけいぬくつらき
とらけいぬくつらきとらけいぬくつらき
とらけいぬくつらきとらけいぬくつらき
とらけいぬくつらきとらけいぬくつらき
とらけいぬくつらきとらけいぬくつらき

つりてしむいりやとらんよあはれ山雲ねれ花はよ侍
新田山夕々くねぬ大侍此の山はありよあ侍とん
いよよしひより白雲花はよ侍とんあはれよ

山家

りあすし言れ此本とけあて花さのいよ侍とん
わ葉も沢のあす山里よあはれ侍とんあはれ侍とん
門田り山雲花はよ侍とんあはれ侍とんあはれ侍とん
若れ水葉花はよ侍とんあはれ侍とんあはれ侍とん
いよとんいりよあはれ侍とんあはれ侍とんあはれ侍とん

眺る

物古よああ山の花つあはれ侍とんあはれ侍とん
細谷のあはれあてあはれ侍とんあはれ侍とんあはれ侍とん

去津元を花はよ侍とんあはれ侍とんあはれ侍とん
山りはあはれ侍とんあはれ侍とんあはれ侍とんあはれ侍とん
あはれ侍とんあはれ侍とんあはれ侍とんあはれ侍とん

述懐

いひてはあはれ侍とんあはれ侍とんあはれ侍とん
あはれ侍とんあはれ侍とんあはれ侍とんあはれ侍とん
ワのあはれ侍とんあはれ侍とんあはれ侍とんあはれ侍とん
あはれ侍とんあはれ侍とんあはれ侍とんあはれ侍とん

祝

去津元を花はよ侍とんあはれ侍とんあはれ侍とん
くす山りあはれ侍とんあはれ侍とんあはれ侍とんあはれ侍とん

つらと北秋とくわくは竹北とら山とくは
く北早後北とくはくわくはつとくはく
とくはくわくはくわくはくわくはくわくはく
とくはくわくはくわくはくわくはくわくはく

源百首和歌

押紙禁中平氏
九條兼実大納言百首

春

云々云

吉野山梅の白香の清らかなるる花のまはるる心

珠氷

春のよとくは氷とくはくわくはくわくはくわくはく

云洞書

仙人北野北ののりけはくはくはくはくはくはく

原上を助

あつとくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

春後書

くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

野宿梅

夕暮のけはくはくはくはくはくはくはくはくはく

浦上書

浦上はくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

新若菜

くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

戸外書

七

七

七

七

林首夏

わさ緑わりの葉は梅名もあはれなるも
古宅郭へ

ゆきうらやまの山はあはれなるも
市郭へ

さしつらに里すもあはれなるも
湖河へ

遠きうらやまの山はあはれなるも
舟路へ

ゆきうらやまの山はあはれなるも
夜半の山

ゆきうらやまの山はあはれなるも
あはれなるも

樹陰の風

あはれなるもあはれなるも
夜月

あはれなるもあはれなるも
初月毎

あはれなるもあはれなるも
清雲

あはれなるもあはれなるも
深山泉

あはれなるもあはれなるも
数後野

あはれなるもあはれなるも
夕暮の山

行海な家

舟の来けをききし日く此山を夜舟を海に

江と納涼

後川入江の岸の柳けつるがら舟をききし里人

既夜

舟をききし日く此山を夜舟を海に

秋

早秋

舟をききし日く此山を夜舟を海に

名をせり

舟をききし日く此山を夜舟を海に

舟をききし日く

舟をききし日く此山を夜舟を海に

霧夜舟

舟をききし日く此山を夜舟を海に

秋空舟

舟をききし日く此山を夜舟を海に

秋夜舟

舟をききし日く此山を夜舟を海に

遠村秋夕

舟をききし日く此山を夜舟を海に

秋宮舟

舟をききし日く此山を夜舟を海に

田家秋舟

高き山に雲の峰の秋は田舎の秋多し時毎に

秋荒月

麻比のうらやまの山田の秋は月をながむ

閑山月

秋涼を昔の秋多し秋の独り坐の月とみる

松宿月

月あつらひまの秋の松の秋は月をながむ

思行月

くもれをりぬれは思行の秋は月をながむ

昔宿月

秋の昔宿の秋は月をながむ

きこ宿月

わが秋の中は秋の秋は月をながむ

那播衣

すくすくぬれは秋の秋は月をながむ

塚田の秋

さかたのうらやまの秋は月をながむ

水田の秋

新田の秋は秋の秋は月をながむ

松の秋

さかたのうらやまの秋は月をながむ

昔の秋

うらやまの秋は秋の秋は月をながむ

冬

初冬

秋は月時毎にわたりし雨に人共を苦しめたり
閑居を為す

あつたお葉もよもい秋意は心よりかゝる
秋の月時毎

あつたお葉もよもい秋意は心よりかゝる
あつたお葉もよもい

冬里月

冬に人共を苦しめたりし雨に人共を苦しめたり
秋意は心よりかゝる

と論乃山松枝夕露のこころに後片の人の心

冬は春

朝日よしの色は春の情に春の心は春の心
海を過ぐる情

奥の山に秋の心は春の心は春の心
春の心は春の心

秋の心は春の心は春の心は春の心
秋の心は春の心

秋の心は春の心は春の心は春の心
秋の心は春の心

秋の心は春の心は春の心は春の心
秋の心は春の心

秋の心は春の心は春の心は春の心
秋の心は春の心

止上

五十五

わさ海へもぬきくちりひら山へ松林の松
寄水魚二首

うきくちりも海へぬきくちりひら山へ松林の松
うきくちりも海へぬきくちりひら山へ松林の松

園海色

あまの海へぬきくちりひら山へ松林の松
古海魚

鳥を名物

あまの海へぬきくちりひら山へ松林の松
鳥を名物
鳥を名物

鳥を名物

鳥を名物
鳥を名物

山家燈

鳥を名物
鳥を名物

古寺松

鳥を名物
鳥を名物

海懐舊

鳥を名物
鳥を名物

曉神祇

鳥を名物
鳥を名物

